

δικαιοσύνη θεοῦ

ディカイオシュネー セオー

知っておきたいキリスト教のことば (40)

神の義 かみのぎ

♪「か～みのく～にとかみのぎを～♪ま～ずもと～めよう～♪」

これは日本聖公会聖歌集第 483 番の歌詞です。「神の国」と「神の義」、歌っている時には余り感じませんが、よく考えるととても分かりにくい言葉です。今回と次回は、この二つの言葉について考えてみたいと思います。

まず「義」という言葉ですが、旧約聖書にも多く出てきます。神さま及び人間の正しい行為のことを「義」と呼ぶのですが、この正しさは、倫理や道徳のように世間一般の判断基準をもとにしているわけではありません。

旧約における「義」(ツアドック)は、その当事者間において正しいかどうかが大切なのです。ですから「神の義」とは、神さまとその民との関係において、民が契約に則した行いをしているかどうかなのです。

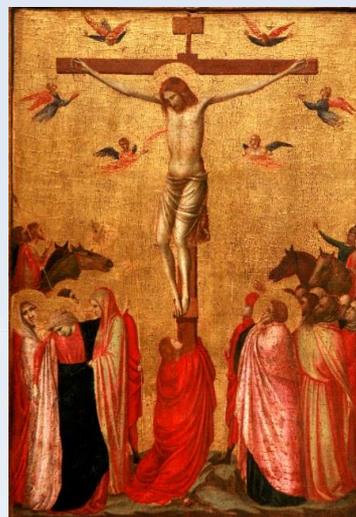
新約の時代になっても、この考え方は引き継がれていきます。聖書に出てくるファリサイ派の人々は、自分たちは神さまの前に義であると考えていました。

しかしパウロは、「義人はいない。ひとりもない」(ロマ 3:10 口語訳)と言います。義とは本来あるべき正しい状態であることも言えますが、自分の行いによって「義」となることは出来ないのです。

パウロは「神の義」とは、救済の出来事であり、イエス様の十字架の贖いによって与えられた賜物であると言います。イエス様を信じることによって、神さまは救いを与えられます。その救いとは、わたしたち人間が神さまと本来あるべき状態に戻る事なのです。

ルターはそれを「信仰義認」、つまり「信仰によって義と認められる」と理解したのです。

次回は「神の国」です。お楽しみに。



「キリスト磔刑」

ジョット・ディ・ボンドーネ

(1267～1337 年)

すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。

(ローマの信徒への手紙 3 章 22 節)

